

ダルマ王の子孫について

佐藤長

紀元七世紀初頭にソンツェンガムポによつて初めて開国された古代チベット王国は、九世紀の前半チツクデツェンの時代になつて全盛を極めるが、次代のダルマ Dar ma に至つて衰退し、八四六年のその死とともに王国は瓦解する¹⁾。而してそれ以後チベットは諸侯の分裂割拠する中世に移行するが、この中世初期のチベット史は、文献の不備のため解決困難な問題が少くない。一般に歴史に関するチベット文献即ちチョエジュン類は、中世史を殆ど寺院の開基、その伝燈次第、教義傳承の記述に費しており、俗的諸侯等の動向は一向記すところがない。従つて一見すると、俗的諸侯等というものは大寺院の支配圏の間隙に微々たる勢力を持つていただけで、中世史の動向には大して役割を果していなかつたようにも思われる。しかし果してそうであつたのであろうか。大寺院を経済的にも軍事的にもサポートし、或は積極的に僧院長を一族から連続的に出して、その地位を独占したのはこれら俗的諸侯であつたのではないか。それはチョエジュンという文献の本質からして、このような諸侯に関する記録が除外されただけで、実際には彼等は強固な地盤をもつて独立しており、一方緊密に寺院に結びつき、そのような傾向は広範圍にわたつて行われていたのではないか。この疑問に答えるために、本稿ではヤルルンシヨウォ *Yar kluns jo bo* (ヤルルン王) とチルブッ *Lcil bu* の寺院との関係を取上げるのであるが、実はこのヤルル

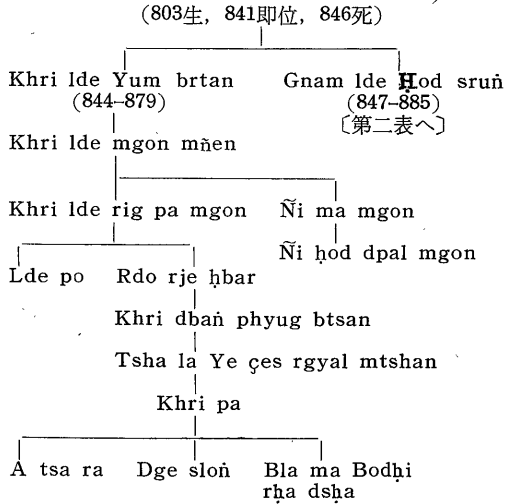
ンジョウォの系統が如何なるものであるかという問題については、従来殆ど研究されたものがなかつた。

古代王朝の発祥地ヤルルン溪谷には、中世にはヤルルンジョウォと呼ばれる小王乃至は諸侯の一家が勢力を張つていた。この一家はチョエジュン類では、ダルマ王の子孫ということになつており、その系譜は各チョエジュンによつて些かの相違はあるが、とにかくダルマから一代も欠けることなく書残されている。当然その系譜は八四六年のダルマ王の死後、少くとも一〇四二年のアティシャ Atiṣa の入蔵までの中世初期の空白時代を含み、その系譜が歴史事実として確実かどうかということが先ず問題となるのである。

そこで最初の作業として、ダルマ王以後の王統を確定化しなければならないが、これに關しては諸チョエジュン類の間に大した相違は見られない。しかし諸王名の綴字にはかなり異同があり、又或る王名が一方では全く欠けていたり、或は親子關係が異つていたりすることも屢々である。最も困惑するのは、最初のダルマ王の二子の事蹟が中国文献の記載と全く一致しないことで、このようなことは問題の王統譜がすべて単なる伝承にしか過ぎず、歴史事実でないのではないかとの疑問を起させるに充分である。従つて本来ならば、各チョエジュン類に記された王系をすべて掲載し、その比較検討を行うべきであらう。しかしここでは煩を避けて、ケーペーガトンによつてその王統を再構成し、これを他史料と比較検討しながら論を進めていつてみよう。ケーペーガトンを特に取上げるのは、この書がロギューチェンモ Lo rgyus chen mo⁽²⁾ ヤルルンジョウォ⁽¹⁾ 仏教史 Yar klungs jo bo chos hbyun⁽³⁾ 等の比較的古い確実な文献を利用してゐるからばかりでなく、著者のパーウオその人が、そのような古文獻を忠実に写すという態度にも信頼がおけるからである。ケーペーガトンによるダルマ王以後の王系は第一表以下のごとくであるが、その書込まれた年代は順を追つて本文において詳しく説明するであらう。

さて最初のダルマ王が八四一年に即位し、八四六年に殺されたことは別稿において述べた通りであるから、ここでは取上

〔第一表〕
ユムテンの系統
Dar ma



づけることはない。

第一の問題は、ダルマの二子ユムテン Yum brtan とオエスン Hod sruñ の存在である。チベット文献ではダルマの後には、この二人によつてチベット王国は二分されたことになつており、例えばケーパーガトンは、丙寅の年（八四六）の翌年のこととして次のごとくいう（P.T. p. 139a）。

丁卯の年（八四七）に、「[ダルマの]少妃ツェボン氏ツェンモペン Tshe spoñ bzaiḥ Btsan mo lphan の孕みし御子生れたれど、大妃の殺害又は奪取せんことを恐れ、常に燈火 ḥod を離さずして守護したる sruñ により、ナムデ・オエスン Gnam lde Hod sruñ と名付け

られたり。そのとき大妃ナナム氏 Sna nam bzaiḥ は、齒の生えたる幼児一人〔を連れ来り〕、「妾にも昨夜生れたり」といいて〔これを〕示したれば、大臣等、「昨夜生れたる幼児に齒生えそろえり。〔信ぜられず。〕されど御母 Yum の御言葉を支持せん brtan」といいて、チデ・ユムテン Khri lde Yum brtan と名付けたり……

それより二人の妃は、それぞれの地方の臣下等によりて支持せられ、ユムテンはウルツ Dbu ru、オエスはヨルツ G-yo ru をこりて、ウ Dbu とヨ G-yo において戦をなせり。

この伝承はどのチョエシユンにも必ず出ており、何れも内容は右のものと殆ど大差ない。ところがこれに対応すべき筈の中

〔第二表〕

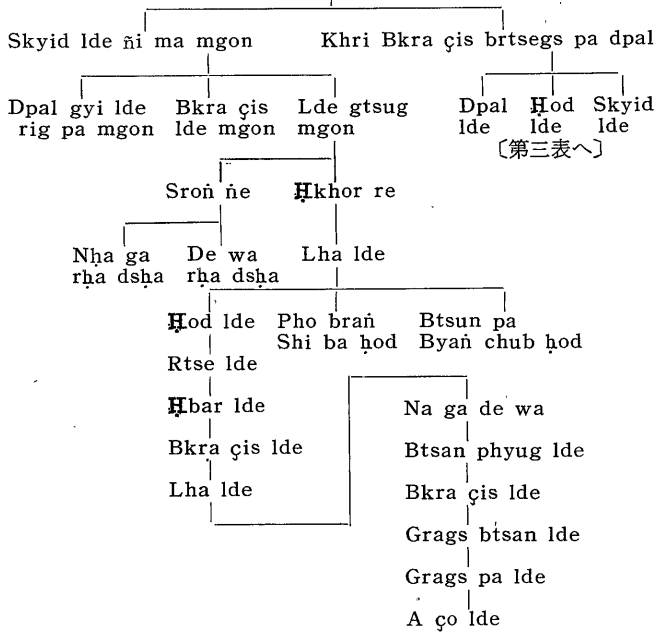
オェスの系統

Gnam lde Ḥod sruiḥ

(847-885)

Mñañ bdag Dpal ḥkhor btsan

(865-895)



国文献の内容はかなり趣を異にしていて、例えば新伝によれば次のごとくである。⁽⁴⁾

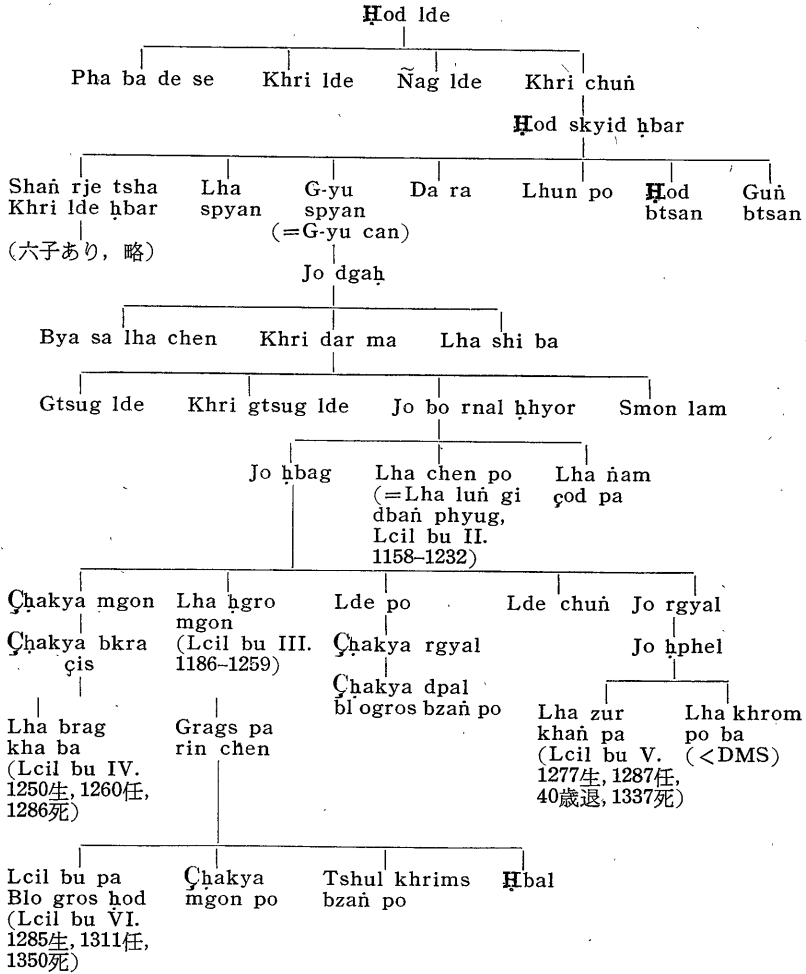
〔達磨〕無子、以妃絛氏兄尚延力子乞離胡、為贊普、始三歳、妃共治其国、大相結都那見乞離胡、不肯拜曰、贊普支属尚多、何至立絛氏子邪、哭而出、用事者共殺之。

ダルマの妃の絛氏はチム Mchims であり、尚延力はシャングェルリグ Shan rgyal rigs、乞離胡はチウ Khriḥu、結都那はバーのギェルトレタグニヤ Dbahs rgyal to re stag sna であることは既に述べた(古代史六、九八頁)。ところ

でこの中国側の記録は余りにもチベット側の伝承と一致せず、全く別の事件を述べているような感を与えられるが、仔細に検討すると、どうもこの両国の史料は同一のことはないかとの疑が濃くなってくる。史料批判の出発点を乞離胡||ユムテンと置いてみよう。ダルマが歿したとき、確に彼には後を継ぐべき子はなかつた。そこで大妃は実家のチム

〔第三表〕

オエデ、ヤルルンジョウオの系統



氏から甥を引取つて養子とし、これを王位に即けた。チベット伝承に、「子に齒が生えていたので昨夜生れたとは信じられないが、とにかく国母陛下の主張することであるから従い申そう」と大臣等がいつたというのはこれに一致する。中国側史料では既に数え年三歳であるから齒が生えていたのは当然である。しかしそれは殆ど前例のない

幼少さであつたので *Khihu* (小王) と称せられたのであろう。

唯このように考えると、問題はその大妃がチベット史料ではナナム氏であつて、チム氏ではないことである。しかし大妃をナナム氏と呼んでいるのはケーパーガトンのこの個処のみで、他の個処及び他書ではすべて大妃 *Chen na* と称するだけで、その出身は明示されていない。そのことを前提に置いて考えると、やはり大妃は真実はチム氏であり、従つて乞離胡もチム氏尚延力の子であるが、生母が尚延力の夫人ナナム氏であつたために、ケーパーガトンは生母を養母と取違え、ナナム氏と信じてしまつたのではないか。もしそうだとすればユムテンはチム氏という何処から見ても堂々たる第一等貴族の出身であるが、王統鏡等には (GR. p. 99a) 。

大妃は即ち乞食の子の、生れて暫くせるを買い、洗い潔めて、「妾に昨夜この子生れたり」といへり。

といつて、大妃が乞食の子をツェンポに仕立てたことをいつている。物語としては「乞食王子」も面白いものであるが、如何に衰頹期とはいへ、貴族、権臣等の跋扈している吐蕃宮廷に、乞食の子が入つてツェンポになり得る筈がない。事実ウラソ史 (RA. p. 18b) / プトン (古代史八、六七頁)、ギャボエ (GB. p. 141b) 等にも、「大妃は幼児を求めて」とあるだけで、乞食の子といつていない。王統鏡のこの所の記載は恐らくヤルンショウオ仏教史を利用して書かれたものと思われる。この書の著者ツルチムサンボ *Tshul Khrius bzau po* は、後にも述べるが、明かにオエソンの血統を引いており (六五頁)、従つてそれは両系統の確執を反映した、古い中傷的言辞を伝えたものと考えられる。同じ王統鏡に (GR. p. 100a) 。

ユムテンの系統は全く正しからざるものといわる。

rigs gin tu ma dag pa yin zer ro /

とらつているのも、この際参照すべきである。又後にも触れるが、或る敦煌文書には、オエソンに対して、王の第二子とし

ての称号を与えたものがあるから、ユムテンが、養子ではあるが、一応形式的にはダルマの長子として存在したことは疑い得ない。乞離胡即ちユムテンと考えるのは一向差支えないのである。

ところでその弟といわれるオエスンは、漢文献には全く述べるところがなく、唯チベット文献にのみ記載が残されている。ケーペーガトンによれば、彼は前述のごとく八四七年に少妃ツェボン氏を母として生れた(三頁)。ケーペーガトン引用のロギューエチエンモは又 (Pt. p. 140a)'

ツェンポ二人(ユムテン、オエスン)は二十三年経たる牛の年(己丑、八六九)に「王政を」とり、臣下の諸叛乱相ついで起れり……最初にバーのコンヘルレグテン Dbahs kho bsher legs steh' ラグペン Lag dpon となり、ドカムにおいて叛乱を起し、ついでウルウ Dbu ru におけるロ Hbro' バー Sbas 両氏の戦によりてバーのロポロチェン Dbahs lo pho lo chen ラグペンとなりて叛乱を起せり。

というが、バーのコンヘルレグテンが中国文献の論恐熱 Blon khon bsher であり、ロ、バー両氏の戦が尚婢婢の属する没盧氏 Hbro' と論恐熱の属するバー氏の戦であれば、これらの内乱は既にダルマ弑殺の直後から起っており、それが相当の長期間継続していることを示しているのであろう。ケーペーガトンはついで丁酉の年(八七七)にシュエブウのタグツェ Jud pu stag rtse 等四人が共謀してツェンポの陵墓を破壊掠奪したことを述べている。叛乱及び王陵の発掘はウラン史 (RA. p. 12a) キギギキキ (GB. p. 142a) にも同様に己丑の年、丁酉の年にかけていて矛盾はない。オエスンの時代はとにかく反乱の連続であつたが、系統内部の争はなく、彼は三十九歳でパンタン宮殿 Pho bran iphan than で乙巳の年(八八五)に世を去つた (Pt. p. 141b)。

オエスンは右のごとくケーペーガトンによつてその年代まで確実に知られるが、彼の実在を証明する根本史料が更に三つ

ある。第一は即ち敦煌文書の或る祈願文に⁽⁶⁾

御子チ・オエスンツェンボ母子。

Iha sras khri hod sruñs brtsan yum.

とあるもので、チ Khri とらう語を用いて彼が王位にあつたことを明かにしている。

第二にラルー女史 M. Lalou が紹介した或る敦煌文書のうちに⁽⁷⁾

jo mo btsan mo hphan gyi sras gyi pho brañ hod sruñ gi sku yon du.

とあることである。ラルー女史はこれを、「王妃はハンの母子 Hphan yum sras のオエスン宮殿からの贈物として」と訳したが、トゥッチ氏は例証を挙げて *pho brañ* を「第二子」の意味に解し、その文は、「御母ハンツェンモ Hphan btsan mo の御子オエスン王子の贈物として」と訳すべきだとしている (P. R. p. 52, p. 1)。トゥッチ氏が註するごとく王妃ツェンモハンの名は全くケーパーガトンの記載と一致しており、この文はオエスンがダルマの第二子としての実在を示す最も有力な証拠である。

第三に同じく敦煌文書の或るものに、「王妃 Jo mo btsan mo の祈願文があり、そのうちに⁽⁸⁾

jo mo btsan mo hphan gyi pho brañ hod sruñ.

とあることで、当然右の例を参照して「王妃ツェンモハンの第二子オエスン」と理解しなければならぬ。オエスンの実在は、もはやこれら三種の史料によつて疑ないものとなる。

ついでオエスンの子ペルコルツェン Dpal hkhor btsan に移るが、この王もケーパーガトンでは「父の十九歳のとき乙酉の年(八六五)」に生れ、「二十一歳の年に父は死して王位に即き」、「三十一歳(八九五)にして世を去つた」といわれ

ている (P.T. p. 141b)。ケーペーガトンは又ペルコルツェンがシュエブウのタグツェとニャグ氏 Gnags によつて殺されたところ (P.T. p. 141a)。ギャボエは生年は同じであるが、三十三年目にニエクタグツェワ Sñegs stag rise da によつて殺されたといふ (GB. p. 146a)。ケーペーガトンと少しく異つてゐる。しかしいづれにせよこの王の实在も亦或る敦煌文書における子等の实在によつて(五九頁)充分に肯定されるのである。

ペルコルツェンの子キデニマゴン Skyid Ide hi ma ngon とタシーツェグパベル Bkra gis brsegs pa dpal は領土の大部分をユムテンに奪われ、タシーはラトエ La stod に、キデはガリー Mñah ris に逃れて、そこに各々住することになつた (P.T. p. 141b)。これら両系にユムテン系を加えて、三つの王統がチベットを支配するようになるが、これより数代の間各王統とも年代記載は全くなく、従つて王そのもの实在も信憑性を欠くようになる。しかしチベット文献を仔細に検討すると、若干の王はチベット或はインドの高僧等と密接な關係を持つており、その高僧等の生存年代から王の实在年代は大凡推定が可能になる。以下二王統の各々について検討を進めてみよう。

一

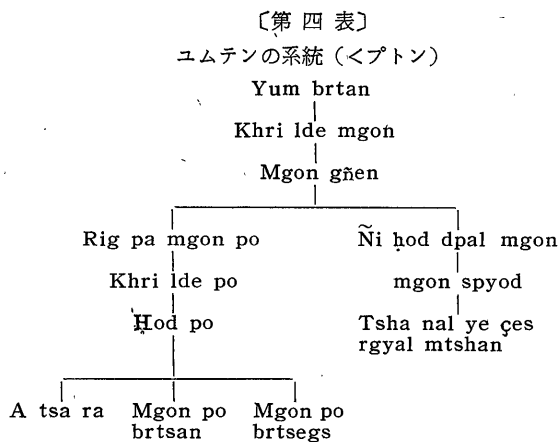
第一にユムテンの系統である。この一家に関しては、何れのチョエジユンにも何等の年代の記載はない。第一開祖のユムテンからして殆ど年代を欠いている。しかし彼が漢文献の乞離胡であるとすれば、八四六年に三歳であつたのであるから八四四年生れということになる。前引のケーペーガトンの記載からして(四〇頁)、八六九年にオェスンと明確に全チベットを分割したことはあり得ることと考えられる。又ペルコルツェンの子二人は、ケーペーガトンその他では領土をユムテンに奪われて西チベットへ逃れたとあるから、これに従えばユムテンはペルコルツェンの歿年八九五年以後暫くの間生きていた

ことになる。しかしユムテンの享年についてはギャボェに (GB. p. 142b)。

ユムテンは御齡三十六歳にて逝きたまい、陵墓はなきなり。

という他書に見られない重要な記述がある。彼が、ダルマが歿したとき三歳であつたとすると、その死は八七九年ということになり、ペルコルツェンより早く歿したことになる。従つてケーペーガトンの記載と合致しなくなるが、ギャボェは又

(GB. p. 146b)。



〔キデニマゴン、チ・タシーツェグパベル〕二人の領地は大方ユムテン一家 Yum brtan tshan に奪われたり。

といつて、ユムテンその人でなく、その「一家のもの」tshan によつてオエス系の領土奪取が行われたとする。ギャボェはオエスンの歿年についても「三十九歳」という、ケーペーガトンと完全に一致した記録を残しているから (GB. p. 142b)。¹⁾ 右のユムテンの享年も亦真実に近いものと見てよい。恐らくケーペーガトンその他は古記録の tshan の語を見落したためにユムテンその人の事蹟のうちこの事件を考へてしまつたのであらう。

甚しく厄介なのはその後のユムテンの系統である。第一プトン等に見える系譜はケーペーガトンのそれとかなり異つている (第四表参照)。²⁾ しかも諸王等に関連する仏教史的事実も何等記録はない。ケーペーガトンの系譜とプトンのそれと何れが正しいかは容易に判断できない。しかしケーペーガトンは

ウラン史、ギャボエのそれと全く同じであり、唯王名の綴字において若干の相違が見られるだけである。又パーウォはこれらの系譜を、「プトンのチョエジュンとヤルルンジョウォのチョエジュンにあるごとく書いた」といつているから、プトンを充分検討している筈である。パーウォのこの言を信じて我々はやはりケーペーガトンの方を一応正しいものと見ておこう。

ところで全く不確定のうちに沈むこの王統もユムテン五代の孫ツァライシーギエンツェン *Tshala ye ges rgyal mtshan* に至つてはじめてその存在が確實となる。即ちケーペーガトンは (Pr. p. 141a)。

ツァライシーギエンツェン〔及び〕その御子チバ *Khri pa*。この御父子二人はサムイエ寺院を敬讃したまい、そのとき
ウイ・ツァンの十人 *Dbus gtsaṅ gi mi bou* カムより〔サムイエに〕来りたり。

といい、有名な「ウイ・ツァンの十人」⁽¹⁰⁾がサムイエでイシーギエンツェン父子に援助されたことを示しているからである。そこでウイ・ツァンの十人——又はウイ・ツァンの六人——の実存年代は何時かということになるが、これが亦一問題を提起するのである。というのはその時代が所謂ダルマの廃仏の辛酉の年(八四一)からアティシャの入蔵(一〇四二)までの暗黒時代にかかり、紀年の直接の手がかりが全くなくなるからである。

そこで暫く本題を離れ、ウイ・ツァンの十人に関する問題をここで詳しく考えてみよう。従来右の八四一—一〇四二年の間の歴史を再構成することは、チベット史家にとつては最大難問の一つであつた。ダルマ王歿後統一王朝は瓦解したため、正確な記録は殆どない。一方又廃仏のために寺院側の記録も亦極めて乏しい。尤も若干の仏教史的事実は残っているが、その年代は全く書残されていない。従つてそれらのいくつかの事実を相互に聯関させてこの間を繋ぐことはチベットの仏教史家等によつても一応は試みられている。しかし何れのチョエジュンを見てもそれらは類型化された聯関の仕方であつて絶え

ることのない一つの連続体を構成している。即ち大体においてそれは、

一、三僧がダルマの廃仏で、危険を察知してカムに逃れた。

二、カムで三僧に受戒して僧となつたのがラチェン *Bla chen* である。

三、ラチェンと三僧に受戒したのがウイ・ツァンの十人である。

四、ウイ・ツァンの十人のうちの一人がルメ *Klu mes* である。

五、ルメの弟子がギェルラカン *Rgyal lha khan* の創設者ナナム・ドルシェワンチュ *Sna nam rdo rje dban phyug* である。

六、ウイ・ツァンの十人のうちの一人スムバ *Sum pa* はアティシャと会つた。

という系列で、八四一—一〇四二年の間に、三僧、ラチェン、十人の三世代を数えているのである。しかし二〇〇年余の間に三世代を入れるということは三世代の伝承者をすべて極めて高齢を保つたと仮定しなければならない。ところがレーリツヒ氏 *G. N. Roerich* はテプゴンの英訳に際し、その著者シヨンヌツペル *Gshon nu dpal* が八四一—一〇四二年の間に、ラプチュン *rab hbyun* (六十年週期) を一回脱落して計算していることを発見した (*B.A. Introduction*)。つまり西暦では明かに八四一—一〇四二年間は一〇一年であるにも拘らず、シヨンヌツペルはこれを一四一年間と見て計算しているのである (*B.A. p.72*)。周知のごとくチョエジュン類では年を干支で表しているため、同一の干支は六十年毎に現れる。従つて記録の不備のためテプゴンはこの間に一ラプチュンを脱落しても一向気がつかなくなつたらしい。チベットなればこそその誤であるが、この誤は他のチョエジュンも同様で、一人としてこの一ラプチュンの脱落に気がついたものはいない。一四一年とすれば三世代を容れるには、適当とはいえないまでも二〇一年よりは余程そのリンクに余裕がある。恐らくはそのためチベッ

トの史家等は脱落を一向気がつかかなかつたのであろう。しかし事実としては二〇一年の経過があつたとすると、この間をこれらの三世代で果して適当にリンクし得るかどうか。そうでなくてさえ三世代の年代配置には苦勞するのに、六十年も実年代をプラスして考えなければならぬとすると、一体如何なる風にこの三世代を配置すべきなのか。

この問題について最初に解決案を出したのは、当然のことながらレーリッヒ氏である (BA. Introduction xviii)。氏はラチェンを八九二年生れとし (BA. p. 63)、ウイ・ツァンの十人がカムから帰つて仏教再興の會議を開いたのを、ロムトン Hbron ston によつて九七八年とする (BA. p. 61)。而してその間に、プトンによればウイ・ツァンの六人はラチェンの弟子のルム・イシーギェンツェン Grun Ye ges rgyal mtshan に戒を授けられたのであるから、ラチェンと六人又は十人との間にルムを入れれば、この間は充分にリンクできるといふのである。

第二にこの問題を扱つたのは中根氏である。氏はバクサムジョンサン Dpag bsam ljon bzam の記載を詳しく検討し、ラチェンの在世年次は八九二—九七五年であり(年代基準一九七頁)、ラチェンとウイ・ツァンの十人との間には二世代少くとも一世代は介在しており、従つて、「十人が三僧と会つたといふのは全く虚偽である」として(年代基準二〇〇頁)。氏の説は年代に関する限りにおいてはレーリッヒ氏の説と異なるところはない。

第三にこの問題を扱つたのはリチャードソン氏 H. E. Richardson である。氏の説はレーリッヒ、中根両氏の説とはかなり相違があるが、ここに氏の作成した年表を転載すると次のごとくである (TIR. p. 62)。

三僧 大凡八〇〇—八七五

ウイからの逃走 八四一—(八四三)¹⁾

ラチェンポ

八三二生、九一五死

ルム・インシーギエンツェン

大凡八六五—九三五

唐の最後の天子（九〇五—九〇七）と同時代

ロエ・マンジュシユリー

大凡八九五—九七〇

ルメ・シエラブツルチム

九五〇—一〇二五

ウイへの帰還

大凡九七八

サムイェにおいて

九八六

ナナム・ドルシエワンチュに授戒

九九三

タンボチエ僧院設立承認

一〇一七（一〇一七）¹²

ナナム・ドルシエワンチュ

九七六生、一〇六〇死

（原註、傍線の年次は或る証拠によつて支持されるもの。他は試論的年次である。）

リチャードスン氏の論文はギェルラカン碑文の紹介を主としたもので、それへの序論として当面の問題が扱われているのであるが、その内容は簡にして要を得、先ず右の諸紀年は最も妥当なものとして受取り得るものである。私もかねてからこの問題に関心をもち、結論は氏と同様の紀年を得たが、その考察の過程は少しく氏と異つているので、些か重複する点もあるが、ここに私なりの解釈を述べておきたい。

三

第一の三僧とラチェンの物語については、ウラン史に次のごとくある（R.A. p. 19a）。

ダルマ王の子孫について 佐藤

ランダルマの仏法を弾圧せしとき、ペルチュウオ山 *Dpal chu bo ri* に在りしツァン・ラブセル *Gtsaṅ Rab gsal'* ヨ・ゲジュン *G-yo Dge hbyun'* マル・シャーキヤムネ *Dmar 'Chakya mu ne* の三人は律部の書を駄驢に積みて、ガリーに逃れ、ガルロゲ *Gar log* を経てウイグルの国 *Hor yul* を廻り、東部ドカムのアンチュンナム城 *An chun gnam rdson* に到着せり。而してボンポの子のスッセルバル *Zu gsal hbar* [教法を] 信ぜしかば、ツァンはケンポとなり、ヨはロブンとなりて [彼を] 沙弥 *dge tshul* となし、名をゲワセル *Dge ba gsal* とつけたり。[彼は] 後にゴンパセル *Dgons pa gsal* と称せられたるものなり。一年経ちて、前述のケンポとロブンに、マルが秘密師となり、ラルン・ペルギドルジェ *Lha luh Dpal gyi rdo rje* は王を殺したるにより、「加わるは適しからず」といいて、シナの和尚 *Ha gan* 二人を送り、合せて五人につきて [ゲワセルは] 具足戒を受けたり。

文中のゲワセルが、後にラチェン (ポ) *Bia chen (po)* と呼ばれる高僧となるのであるが、彼に関する紀年は次のごとく定められる。

先ず生年であるが、テブゴンは彼を転生者と見なし (B.A. p. 63)。

護教王 (ニツックデツェン) の宰相 *bkah blon* たりしものにロ・タケナンチスムジエ *Hbro Stag snai khri sum rje* といえる大臣ありき。三十五歳のとき辛亥の年に発願して逝きたるが、彼は壬子の年にツォンカのデカム *Tson kha bde khams* に転生せり。

とあり、レーリツヒ氏はこの辛亥の年を八九一年、壬子の年を八九二年と記入している。そこでラチェンの前生者のロ・タケナンチスムジエとは一体何者であるかということになるが、リチャードスン氏は、これを有名なロ・チスムジエタケナン *Hbro khri sum rje stag snai* と同一人と見、年代は辛亥 || 八三一年、壬子 || 八三二年と訂正すべきことを主張した (TIR.

らる。チスムジエタグナンは漢文献の「尚綺心児」であるから、チデソソツェンの末期からチツクデツェンの初期にかけて活躍した吐蕃の最高幹部の一人である。敦煌文書吐蕃編年記の宰相表には、彼をチツクデツェン時代の大論として記しており(古代史八、二四頁)、長慶会盟の際には(八二一—八二二)、既に吐蕃の最高司令官の職にあつた(古代史九、〇〇頁)。又八一五年のチツクデツェンの即位のときも、遠くウイグルの本拠カラバルガスン攻撃に総指揮官として出動している(古代史六、七三頁)。従つて彼はこの頃少くとも壮年には達していたのであろうし、会盟後十年目の八三一年に歿したと見るのは極めてあり得ることである。レーリツヒ氏のごとくこれを八九一年にとれば、彼が九十一歳まで生きたとしても会盟のときは二十一歳であり、カラバルガスン攻撃のときは十五歳となり、如何に貴族制の確固としていた吐蕃でも、このような年齢で大軍を掌握、指揮できる筈がない。リチャードソン氏の辛亥₁₁八三一年説は、タグナンチスムジエを尚綺心児と見る限り、正しいものとしなければならぬのである。

ところで問題が二つ残る。第一はチスムジエが三十五歳で歿したということであるが、それが真実とすれば、又長慶会盟、カラバルガスン攻撃の時期に彼は余りにも若過ぎ、全くあり得ることとは思われなくなる。そこで三十五歳というのは何等かの誤としなければならぬ。第二にリチャードソン氏も既に注意しているところであるが、ジャンチスムジエは敦煌陥落のときの総司令官であることである。藤枝氏は敦煌陥落を七八一年と見(14)、ドミエヴィル氏 P. Deméville は七八七年(貞元三年)と見ているが、(15)そうするとチスムジエは恐しく早くから総指揮官の地位に就いていたことになる。さすがにリチャードソン氏も、ドミエヴィル氏がチスムジエのこの方面の活躍を七六七—七八六年としているのを引用してはいるが、この年代を断定的なものとは見ていない。それはそれとして敦煌攻陥に大軍は必要としないから彼はせいぜい方面軍司令官程度のものであつたろうとの推測も成立しないわけではない。しかし漢文献にはこのときツェンボ自ら——当然チソソ

デツェンである——南山まで出動して来たというから吐蕃軍が大軍でなかつたとは到底思えない。とすれば尚更七八一年乃至は七八七年から長慶会盟の八二一年まで、チスムジエは継続して総指揮官の職にあつたとしなければならなくなる。そこでもしそれ程長期にわたる在職であれば、チソンデツェンの第一詔勅やチデソンツェンの詔勅の盟誓者のうちに、必ず彼の名は明確に現れなければならぬ筈である。ところがそれが両詔勅の何処にも彼の名は全く見出すことはできないのである。というのは当面問題のジャンチスムジエはチツクデツェンの時代になつて初めて中央に登場した人物であり、敦煌攻陥のときのジャンチスムジエとは名は同じであつても全く別の人物であつたからではなからうか。

ジャン shan は吐蕃王朝と外戚関係にある氏族のとる称号であり、何もロ氏にのみ限らない(古代史七)。チスムジエという名もありふれた名であつて、チスムジエタグナン一人の専用とは限らない。チデツクツェン時代の宰相にはバーのチスムジエツァンシエル Dbahs khri sun rje rtsan bsher があり(古代史八)、チデソンツェンの詔勅には、大論等のうちに、ランのロンチスムジエペグラ Rlan blon khri sun rje speg lha' 少しく綴字の異つたものにバーのロンチスムシエルドツェン Dbahs blon khri sun bsher mdo btsan があつた(TRK. p. 103)。敦煌攻陥の尚綺心児はチツクデツェンの宰相であつた尚綺心児と同一人と考える必要は毫も存在しないのである。

ところでジャンチスムジエタグナンが三十五歳で歿したという問題は以上の考察を以てしても充分には解けない謎である。しかしここでは彼がチツクデツェン時代の宰相であり、八三一年に歿したということは大にあり得ることとして確認するに止めたい。そこでこれを確認すれば、その転生者と信ぜられるラチェンは八三二年生れということになり、到底八九二年出生説は成立しないのである。

ラチェンに関する年代はテプゴンに (BA. p. 67)。

ラチェンポは四十九歳のときタンティグ山 *Dan tig* に至り、三十五年そこに住し、八十四歳のとき乙亥の年に逝けり。とあるが、乙亥の年は当然レーリッヒ氏のいう九七五年でなくて、リチャードスン氏の主張する、それより六十年前の九一五年でなければならぬ。

第二の問題はウイ・ツァンの十人の存在である。即ちウイ及びツァンから選ばれた十人の僧がカムに至り、ラチェンに受戒して初めて正式の僧侶となり、後九七八年にウイに会して、それより中央チベットに宣教を開始した。所謂後期弘通 *Pa yi* *pa* の始りで、チベット仏教史上重要な意義をもつ年代であるが、この九七八年は如何にして決定されたか。

ウイにおける仏教復興の年次は必ずしも古くから説が一定していたわけではない。プトンはウイ・ツァンの十人がウイに会したとき、或る老婆が彼等に辛酉の年に麁仏があつてから七十四年経つて癸酉の年に仏教が復興したと述べたという説を紹介している (*BT. p. 152a*)。プトンの場合は当然辛酉は九〇一年と見なすべきであろう。従つてそれより七十四年目の癸酉の年は九七五年となる。テプゴンはこの説に批判的で、次のごとくいう (*BA. p. 61*)。

教法の歴史に優れて学識ありしロムトン *Hhron ston pa* は、「戊寅の年に「教法は」復興せり」という。アティシャが入蔵せられし戊午 (一〇四二) は戊寅の年より六十五年目なり。

即ちテプゴンはロムトンの説により、仏教復興を戊寅の年とし、その戊寅はアティシャ入蔵から逆算して六十五年目の戊寅九七八年であるというのである。ロムトンはここでは戊寅の年といつただけで、アティシャの入蔵の六十五年前のそれというのはテプゴンの解釈である。解釈の仕様ではこの戊寅は或は更に六十年前の戊寅 (九一八) に遡らされるかも知れない。しかしこの年が確実に九七八年であることは、次の事情によつて証明される。即ちウイに集つた十人のうちのルメは九九三年生れのナナム・ドルジェワンチュに授戒しており、更に彼は一〇一七年のタンポチエ僧院の設立にも認可を与える等の関

係を持つてゐる。九一八年に會議に出席したとすると、一〇一七年まで生存していることは先ずあり得ない。テブゴンがこれを九七八年の戊寅と見たのは決して誤つてゐることではなく、先はこの説を最も權威あるものとして我々は承認しなければならぬのである。

さて九七八年にルメを初めとする十人がウイに會して宣教を開始したとすると、彼等は当時既に青壯年の頃であつたとなければならない。しかしその彼等が九一五年に歿したラチェンに受戒するといふことが一体可能であるうか。具足戒を受けるのは十八歳以後が普通であるが、ルメを例にとつて計算してみると、ラチェンがその死の年に戒を授けたとしても、彼が一〇一七年にタンポチエ僧院の設立を承認するまで優に百年以上も生きていなければならず、到底このリンクは成立しない。

レーリック氏はラチェンの死を九七五年としているから我々程の困難には陥らなかつた。しかしそれでもこの両者の間にルム Grum を入れ、ルメ等はルムから受戒したのであるとしている(BA. Introduction)。リチャードスン氏はルムの次に、更にバシエ Sba bshed にちつて、ロ・マンシヨリー Gyro Ma hdsu grhi (Manjuri) を入れるが、第一のルムについてはバシエにラチェンの受戒の後のこととして (BZ. p. 85)。

それより五年経ちてヌブ・バプシン Snubs Babs gin とルム・イシーギエンツェン出家せり。「受戒を」ケンボ(三僧のうちの一)ヨ・ゲジュン(に願ひしが、「我は年老いて世話しがたし……」)と仰せられたり。ムンツァ・ゲワツェル Mun dsa Dge ba stsal (ラチェン) は、「受戒についての世話は我なさん」と申すに、「受戒」[そのもの]も亦汝なせ」と仰せられたり。「我は」[受戒より]五年以上経ず。「授戒し得る」ケンボとならんには比丘 dge ston として十年経ると必要なり」と。「ゲジュン」、「大師の教を増大するため、軽く考えてケンボをなせ」と誠を与えたれば、「ラチェンそ

のごとく」なしたまえり。

とあり、ルムはラチェンの受戒より五年後にラチェンから受戒したことをいう。受戒の時期が近接していることは一見この二人がやはり近接して生存したことを思わせるが、ルムの生存年代については、リチャードスン氏は又テプゴンの (B.A. p. 55)。

最後の唐の天子は、ルム・イシーギエンツェンの教法の護持者たりし *bstan pañi bdag byed* ときと同時代なり。

という記事に注意すべきことをいつている (TIR. p. 60)。これによれば唐の哀宗 (九〇五—九〇七在位) のとき、即ちルムはカムで指導的立場にある僧侶であつたのであるから、ラチェンの晩年には確に彼は少くとも壮年には達していたのである。リチャードスン氏が大凡八六五—九三五年に彼の生存を係けたのはあり得る穩当な見解として受取りたい。

第二にロのマンジュシュユリーの存在であるが、やはりバシエにウイ・ツァンの十人とともに興味ある記事が出てくる (BZ. p. 87)。

このとき東部 *Mdo snad* の地方に、師弟の教法の伝承は絶えずしてありと称せられ、チベットにおいて信仰持てるもの、法を行ぜんと欲するものはすべてカムに受戒すべく赴きたり。後にルメ等十二人と、道の途中において引帰せしもの一人合せて十三人行きたり。ルム・イシーギエンツェンのもとにロ・マンジュシュユリー〔行き〕、彼 (||マンジュシユリー) のもとに、

ルメ・シェラブツルチム *Klu mes Ges rab tshul khrims*

スムバ・イシーロト *Sum pa Ye ges blo gros*

リン・イシーユンテン *Hbrin Ye ges yon tan*

ダルマ王の子孫について 佐藤

ラフシ・ツルチムジュンネー Rab gi Tshul khriṃs ḥbyuṃ gnas

マ・ジャンリンボチェ Sma Bṃan rin po che

ボェ・ゲフエンテン Bod Dge ba yon tan

ヤンゴン・イシーユドワン Yaṃ goṅ Ye ges g-yu druṃ

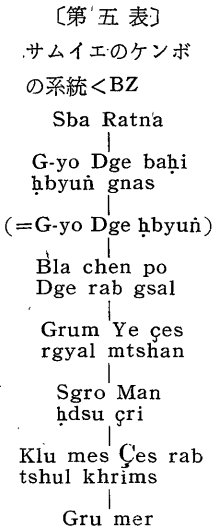
ロトン・ドルジェワンチュ Lo ston Rdo rje dbaṃ phyug

ツォンケ・シエラフセンゲ Tshoṅ khe Ḣes rab seṅ ge

ラグデ・ゲニエンチグ Lag bde Dge sṃen gcig

等行きたり。そのとき道にバ・ユムナン Sba Sgom snah と会ひて、ルメとラグシ Rag gi は「彼に」戒を授け、名をロドエ Blo gros と付したるが、東部に至らざるにより彼は戒なきものと称せらる。

これによつて戒律伝承はルム、マンジュシユリ、ついでルメを含む十人という系列で行われたことが分るが、パシエのサムイエのケンボの系統を記した部分も (Bz. p. 89)、これに矛盾なく一致するのである (第五表参照)。



ところで新に登場したロ・マンジュシユリーの生存年代は全く不明である。唯彼がルメに戒を授けたケンボであるから、これの生存年代から推定するより他はないであろう。しかしルメもその前半生は年次を欠いているから結局その弟子ナナム・ドルジェワンチュの時代から逆算していつてみよう。

さてドルジェワンチュなる人物であるが、彼は有名なギェルラカン寺院 Rgyal lha khan の創設者であり、彼に関する

年代はテブゴンの中に明記されている。中根氏が既に注意するごとくテブゴンはドルジュワンチュに始まるギェルラカンの僧院長の系譜と年代を途中欠けることなく著者シヨヌヌベルの時代まで記している(年代基準一九四頁)。従つてその年次を西曆に換算することは極めて容易であり、レーリツヒ氏が換算した年代は信頼に価する確実な材料となるものである。その結果ドルジュワンチュは九七六年に生れ、一〇六〇年に歿しており、彼がルメに受戒したのは九九三年であることが分る。これを手がかりにルメの年代を次に考えてみよう。

ウイでの会合、ドルジュワンチュへの授戒は既に述べたので、残るところは主として彼が自ら建立した寺院の開基年代である。ケーペーガトンには彼の業績について (P. I. p. 127)

己酉の年にモルギェル寺院 Mor hgyel 建立せられたり。翌年には善知識レン〔イシーバル〕Glan [Ye ges hbar]、
ゴク〔ジャンチュブジュンネー〕Rhog [Byan chub hbyun gras 彼につきて] 出家せり。その次の年にはイェルバ
バラン Yer pa ba ran 建立せられたり。

というが、テブゴンにも同様の文があるから、レーリツヒ氏によつて己酉の年は一〇〇九年と定めることができる(17)。一〇〇九一〇一一年の右の諸事実も結局リチャードスン氏の表のうちに矛盾なく納まり得るものである。

又ルメの関係した寺院にソルナグタンポチェ Sol nag than po che があるが、この寺院はテブゴンによれば、ルメの弟子ドゥメル Gru mer が師の許可を得て一〇一七年に建立したことになつてゐる (B. p. 88)。更にテブゴンは、「他の報告」によつて「彼等(ルメとその弟子等)が庚申の年(一〇二〇)にイェルバラカン Yer pa lha khan を建立した」とをいう (B. p. 74)。以上を総合して、ルメは仏教再興の九七八年から一〇一七年或は一〇二〇年までは確実に生存していたことになり、リチャードスン氏の九五〇一〇二五年の年代は妥当なものとして受け容れられるであろう。

ルメの年代を右のように考えて大して過ないとすれば、更に遡つてマンジュシュリーの年代を氏が凡八九五—九七〇年とするのも穩当な設定とみてよい。

四

以上でリチャードスン氏の年代設定が大体において誤ないものであることを見たが、これを以て再び先に簡条書で挙げたチョエジュン類の一般的な伝承(一二頁)、特に中根氏の利用したパクサムジョンサンのそれを検討してみよう。カムでラチエンが三僧に受戒したというのは確實なものと見てよい。しかしウイ・ツァンの十人が、三僧とラチエンに受戒したというのは極めて疑わしい。パクサムではラチエンが受戒して五年目に、十人に授戒したことになつてゐるが(年代基準、二〇五頁)、パシエでは更にマンジュシュリーが入つてゐるのであるから、パクサムはこの二人を飛ばして直接ラチエンと十人とを繋いだのである。尤もパクサムがこのような法統伝承を展開した原因はプトンにあると思われる。プトンのチョエジュンでもこの点は同様で、十人は三僧の一人ツァン・ラブセルに受戒を願つたが、ツァンは、「自らは年老いてゐるからラチエンに頼め」といい、その通り行われたという(BT. p. 147b)。結局プトン等の誤つた法統についての考えが、他のチョエジュンの中に取入れられて、後世の史書に伝えられたものと考えられるのである。

尤もプトンも、「或る書によれば」として(BT. p. 151b)。

ラチエンポーヤゴンイシーユンドグワン Ya gon Ye ges g-yun druñ—ルム・イシーギェンツェン—ルメ

ラゴンパセル Bla dgon pa saal (—ラチエンボ)—ロ・マンシユンシュリー Sgro mañdsu grñi—ルム・イシーギェ

ンツェンールメ

の二つの系統を挙げてゐるから、右の継承を絶対確實なものとは見てゐなかつたと思われる。パクサムもやはり、「或る説による」として(年代基準、二〇五頁)、

彼(≡ラチェン)の他にルム・イシーギェンツェンとヌブ・ジャンチュブギェンツェン *Saubs Bryan chub rgyal mshan* 等も亦受戒して、律明法の講義を聴聞せりというも、ルムはラチェンの弟子といわる。

といひ、ラチェンからルメまでの継承について四つの異説を述べてゐる(年代基準、二〇〇頁)。いずれにせよエジュン類は一ラブチェンの脱落到氣がついてゐないために、プトンのような伝承で別に不自然さを感じなかつたのであらう。しかしもし彼等がこの脱落到氣ついていたならば、多くの「或る書」に記された伝承は彼等によつて充分再検討が行われた筈である。有名な三僧、ラチェン、ウイ・ツァシの十人が一ラブチュンを脱落したままで相互に直接して繋がれ、この間の歴史を構成したのは結局記録の不備ということに原因を求めざるを得ない。

さて本題に戻つてツァライシーギェンツェンとウイ・ツァンの十人との關係を考へてみよう。ケーペーガトンに出てくる両者の關係は確實なものとしては前掲の記述のみであるが(四四頁)、パシエには十人のカムからの帰途のこととして(BZ. p. 87)、

ウイにおいて何人に信倚すべきやを協議せるに、法域(≡サムイエ)にツェンポ・チ *Bisan po Khri* とゐるもの坐せば、彼に信倚せんといひてサムイエに行かれたり。ツェンポは引入れて、「御身等の頭は何人なりや」と尋ねたれば、「ルメなり」といへり。

とあり、初めてこのとき彼等がサムイエに至つたことをいう。しかしギャボエには「サムイエの王統保持者、支配者ツァラ

ダルマ王の子孫について 佐藤

ナ Tshwa la na 父子」がウイ・ツァンの十人を派遣したことをい(GB. p. 296a)。(同上) (GB. p. 298a)。

六十八年の間ウイ・ツァンにおいては何等の釈説の成就、德行も聴かれず、庚午の年にウイ・ツァンの十人はサムイェに至り、王は敬礼と大供養をなし、教法の火を死灰より起したまえり。

という。ギャボエではダルマの廃仏を癸亥の年(八四三)にかけており、又一ラブチュンの脱落があるから、六十八年は百二十八年とすれば庚午の年は九七〇年となる。十人がウイに会したのは先に九七八年と見たが、それは何れが正しいかは決定できない。それはそれとして、重要なのはやはりギャボエがツァライシーギエンツェン父子によつて十人がカムに派遣され、又彼等がサムイェに帰つて王の庇護を受けたといつてゐることである。バシエとギャボエを併せ考えると、十人はツァライシーギエンツェンによつて派遣され、九七〇—九七八年にサムイェに帰つたときは、その子のチパ Kuri pa によつて厚遇されたことになる。これによつて我々はツァアラとチパの交代は九七〇年前後に起つたと推定できるのである。

ユムテンの系統は、従来年代が全く不明のまま、従つてその系統に属する諸王も実在は不確定であつたが、とにかく彼等が実在したことは、右のツァアラとチパの例からしてもはや疑い得ないと見てよい。

五

さてユムテンの系統を終つたので、次にオエスンの系統を取上げよう(第二表参照)。オエスンの子ペルコルツェンについては、ケーペーガトンには (Pt. p. 141b)。

支配者ペルコルツェンは御父の十九歳のとき乙酉の年(八六五)に生れられ、二十一歳のときに御父逝かれたれば、王位に即き……三十一歳(八九五)にて逝かれたり。

とあるから、彼の生歿年次は明かで、その実在も勿論疑う余地はない。しかしその二子キチニマゴン Skyid Ide ni ma ngon、チ・タシーツェグパル Khri Bkra gis brtsegs pa dpal 及びその子の諸王に至ってはチベット文献には全く年代的な記述はなく、僅の事蹟が記されるだけである(第二表)。最も著名な事件はこれら二子の中央の所領がユムテン系に奪われたことで、これによりキチはガリーに、タシーはフトエに移り住むことになった。キチの三子は更にマルユル Mar yul、プツラン Pu hrañs、シャンシュン Shañ shun に所領を分つことになるが、これら親子に関するチベット文献の記載は類型的で、その実在は充分に証明することができないままであつた。しかしアッカシ J. Hackin の紹介した或る敦煌文書には、「大乘の加持力を得たるもの」として⁽²⁸⁾

ツェンポ・チーキリン Btsan po Khri kyi lin <Khri Skyid Ide (ni ma ngon)

パルジンゴン Pal byin ngon <Dpal gyi (Ide rig pa) ngon

タシーゴン Bkra gis ngon <Bkra gis (Ide) ngon

レグツグゴン Leg gtsug ngon <Lde gtsug ngon

ツェンポ・タシーツァグパル Btsan po Bkra gis rtsags pa dpal <Bkra gis brtsegs pa dpal

パルデ Dpal Ide

オデ Ho Ide <Hod Ide

チデ Hkhri Ide <Skyid Ide

の諸王名を挙げており、多少の綴字の変形はあるが、それぞれ対照するごとく、ケーペーガトンの王名に完全に一致するのである。時期的にみて敦煌文書は同時代のものと考えられるから、これらの諸王はもはや伝承的な存在ではなく、実在の人

物であつたとせざるを得ない。

便宜上以下はキデニマゴンとタシューツェグパベルの二つの系統に分つて検討を進めよう。

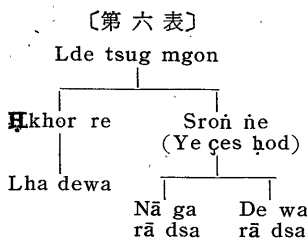
第一のキデの系統はシャンシュンを所領としたデツグゴン *Lde gisug mgon* の子孫によつて後世まで継承される(第二表)。唯ナガデワ *Na ga de wa* 以後についてはトゥッチ氏がネパールにおいて貴重なマルラ王朝 *Malla* の碑文を得て、その内容との対照によりかなり具体的な年代を推定しているから(Pr. p. 66) ここでは省き、それ以前を問題としたい。

さてデツグゴンの二子ソング *Son he* コルレ *Hkhor re* については困難な問題がある。プトン、ケーペーガトンとはデツグゴンとソング、コルレとの間に親子関係を設定しているが、テプゴンはデツグゴンではなく、その兄タシューデゴン *Bkra gis Ide mgon* を父親と見なしている。第二にケーペーガトンではソングを殉教者として有名なイシューオエ *Ye ges hod* と

同一人に見ているが、プトン、テプゴンはコルレをイシューオエと見なしている。第三に、従つてケーペーガトンではコルレの子がラーデ *Lha Ide* であるが、プトン、テプゴンではソングの子がラーデになつている。この三代の間の親属関係を確定することは現在では頗る困難であるが、トゥッチ氏の一つの解釈を紹介しよう。氏はチベット探検の途上コジャルナート *Kojarnath* の案内記 *Kar chag* を入手したが、それによれば第六表のような系譜が辿れる(Pr. p. 63)。

表のうちラーデワ *Lha dewa* はトゥッチ氏の *lha = dewa* (≡ *deva*) に重複された王名であることは明かである(Pr. p. 62)。而してこれがテプゴンに現れるラーデ *Lha Ide* の誤

写であらうといふのも(*ibid.*) 亦當つてゐるであらう。氏は更に進んでコルレの子とテワラーシャ *De wa rä dsa* (≡ *Devatäja*) との間に混同が生じたものと見なしているが(Pr. p. 64) これでも一つの解釈が成立する。即ちラーデはラーデワとも誤



られるだけに、デワラーシャとも混同され、それによつて父親がソングと誤つて考えられたのであらうと。ラーデの父がコルレであることは疑なく、この子孫のみが後々まで王統を継承するのである。尚ダライ仏教史はこの正しい王系譜を述べているにも拘らず、コルレをイシーオエと見なしたのは (VDL. p. 46b)、完全な誤としなければならぬ。王系は右のごとく一応確定することはできるが、しかしこれら諸王の実年代ということになると何等の手がかりも得ることはできないのである。

唯次の時代のラーデについては、テブゴンのリンチェンサンポ Rin chen bzän po の項に (B.A. p. 68)'

ラチェンポ・ラーデツェン Bla chen po Lha Ide bsan は彼 (＝リンチェンサンポ) に「王の帰依処」Dbuñi mchod gnas の称号を与えたり。

とあり、これによりラーデはリンチェンサンポと同時代に生きていたということになるであらう。リンチェンサンポの生歿年次は九五八一—〇五五年であり (B.A. p. 68)、アティシャが入藏した一〇四二年には八十五歳であつたというから (Ibid)、ラーデの帰依処となつたのは十世紀末から十一世紀初頭にかけてのことであつたと思う。

その子のオエデ Hod Ide のときには有名なアティシャの入藏があつた。アティシャの招請に積極的に働いたのはオエデの弟ジャンチュポオエ Bryan chub hod であるため、彼の名の方が有名になつたが、テブゴンは明かに (B.A. p. 70)、オエデ王のときにアティシャは招請せられ、教法を改革せり。

と述べているから誤はない。これでオエデは一〇四二年前後に王位にあつたことが確認できる。

オエデの子ソエデ Rise Ide のときには丙辰の年 (一〇七六) に「丙辰の宗会」Me pho hbrug gi chos hkhor とする有名な宗会議がウイ、ツァン、カムの三蔵把持者 sde snod hdsin pa 等によつて行われた (B.A. p. 70)。ソエデの在

位年次はこれによつて大體の見當をつけることができるのである。(19)補(一)

ツエデの子バルデ Hbar Ide' その子タシーデ Bkra gis Ide' その子ラーデ Lha Ide (Bha Ide < BA) 等につらでの事蹟は何等伝えられていない。ナガデフ以後の王統の性格及び諸王の在位年次は、前に触れたごとく、トゥッチ氏の優れた研究に譲り、ここでは敢て述べないことにする。

六

さて残る第三の王統はタシーツエグパペルの系統である。タシーとその三子の実在については既に論証した(二六頁)。その三子の一人オエデ Hod Ide' の子がチチュン Khri chuñ で(第三表)、彼がヤルルンに至り、ワンツィグ Hbañs brsigs とチンガタグツェ Hchin na stag rtse に住して所謂ヤルルンジョウオの祖先となる(PT. IV. p. 142b)。その子はオエキバル Hod skyid hbar' の子トチン G-yu spyan (G-yu can < BA)、その子ジョガー Jo dgah と代を重ねるが、チチュンからユチュンまでの事蹟はチョエジュン類には何等見出すことはできない。ジョガー及びジャサラチュン Bya sa lha chen に至つて初めて事蹟は明かになり、その年代推定も或る程度まで可能となる。補(二)

ジャサラチュンはジャサのラカンソマ Lha khan so ma を建て、ギヤマのオントン Dbon ston に開堂式を依頼した(ラウ (PT. IV. p. 143a))。ギヤマのオントンはカダムバの一派ギヤママ Rgya ma ba の第二代座主オントリンポチエ Dbon ston rin po che 七一三八一二二〇年の在世である(カダム派 (史二〇四頁))。又ジャサラチュンはバグモテウパ Phag mo gru pa (一一一〇—一一七〇)を自らのラマとして仕え(PT. IV. p. 143a)、更に著名なタントラ行者ギェルワテンネ Rgyal ba ten ne (一一二七—一一二七)はラチュン Jo bo lha chen に十八歳の年から三年間役人として仕えたといふから(BA. p. 930)。

併せて考えてラチェンは十二世紀の後半を中心として生きた人物であることが分る。

ラチェンの甥ジョウォネンシヨル Jo bo Rnal hbyor もそれ自身の紀年は何等ないが、ログ・シエラブオエ Rog Ces rab bod (一一六六一—二四四)の後援者であつたから (BA. p. 945)、十二世紀後半から十三世紀前半にかけてのヤルルンシヨウォと考えられる。

ヤルルンシヨウォの系譜はテブゴン、王統鏡にも述べられており、ケーペーガトンのそれと殆ど相違はない。しかし前二者ではそれはチチュン以後親子相伝で継承されており、それらの兄弟については殆ど記すところがない。従つてこれのみを以てしては単にこの系統はそれが古代王朝の血統を引くにも拘らず、ヤルルン溪谷に地盤を持つ極めてありふれた小諸侯に成り下つたと考えられるかも知れない。しかしケーペーガトンに記す系譜からは、我々はこの王統が依然として名門を誇る中世貴族として再生していることを教えられるのである。

第一にシヨウォネンシヨルの子のラチェンポ Lha chen po (又はフルンギワンチュ Lha Lun gi dban phyug) であるが、ケーペーガトンには、次男の彼が、「出家してチルプツ Lcil bu の座主となつた」ことをうつつており (PT. IV. p. 143a)、一方テブゴンのカダムパ、チルプツ Spyil bu の座主の項には、その第二代にラルンギワンチュの名を挙げ、彼はシヨウォネンシヨルとナナム氏ペンレン Sna nam gzah Dpal hdren の子として一一五八年に生れたといつている (カイヤム^{派史三三頁})。これによつて Lcil bu は Spyil bu と同一の名であり、チルプツ僧院長の第二代はヤルルンシヨウォ家から出身したことが明かとなる。⁽²¹⁾

第二にシヨバグ Jo hbag の子のラーロモン Lha Hgro mgon である。ケーペーガトンにはやはり「チルプツの座主となり、奇蹟辺際なし」といふが (PT. IV. p. 143a)、テブモンでは第三代座主としてラーロウエーゴンポ Lha Hgro bahi mgon

po が挙げられており、父をジョバグ、母をラーチグツァムリン Lha cig Deam gin と述べている(カ1三七頁)。生年は一八六年、座主職に就いたのが一二三三年というから(前掲書)、叔父のラルンギワンチュの死後直に後を継いだのであろう。時代は正に元朝の初期に当り、彼はサキヤバのバスバとも親しかつたことがテブゴン等には見えていて(カ1三六頁)。ロウエーゴンボの兄シャーキャモン Chakya mgon はサキヤパンディタ Saska pañdita の檀越となつたと(カ1四三頁)。(Pt. IV. p. 143a) 同じくロウエーゴンボの弟デポ Lde po の孫シャーキャバルキロトエサンボ Chakya dpal gyi blo gros bzau po もバスバについて出家し、その近侍となつたといふ (ibid)。従つてサキヤバとヤルルンジョウオとはこの頃かなり親密な関係にあつたと思われる。

第三はシャーキャゴンの孫ラーラッカーワ Lha Brag kha ba である。テブゴンにはチルプツの第四代座主としてラーラッカーワ・ロトエイシー Lha Brag kha ba Blo gros ye ges の名が挙げられ、父はジョウオシャーキャタシー Jo bo Chakya bkra gis、母はキョルモタルギェン Skyor mo dar rgyan (Skyo mo < R.A. p. 28a) とされてゐる(カ1三五頁)。一二五〇年生れで、一二六〇年から二十七年間座主を勤め、三十七歳で歿したといふから(前掲書)、その就任時は僅か十一歳であり、僧としての実力等ある筈はなく、門閥がその背景になつていたことは疑ない。明かにこの頃にはチルプツ寺院はヤルルンジョウオ家に独占的に支配されていたと見るより他はないのである。

第四はロウエーゴンボの弟ジョギェル Jo rgyal の孫に当るラーズルカンズ Lha Zur Khan pa である。ケーペーガトンには、「チルプツを支配せり」とあるだけであるが (Pt. IV. p. 143a) テブゴンにはジョムル Jo ber (Jo rhpel < Pt) の子として一二七七年に生れ、一二八七年にチルプツの第五代座主となつたことをいう。この場合も就任時の年齢は十一歳であり、門閥出身のみがその理由であつたと考えられるものである。

第五は第四代の甥のロトエオエ Bio gros hod であるが、これもテプゴンでは第六代座主ラーロトエオエ Lha Bio gros hod であり、父の名はガータケ・ラグパリンチュン Miah bdag Grags pa rin chen、母の名はラーチゲドルジエ Lha scig Rdo rje といい(カニダム派^(史三五頁))、父の名はケーペーガトンのそれに完全に一致している。

ケーペーガトンの系譜はこの世代で終り、テプゴンは更に若干のチルプウの座主名を挙げるが、もはや紀年は明かでない、又出身も何等触れるところがない。⁽²²⁾しかし右の記述が暗示するごとく、多分それらは暫くは引続いてヤルルンジョウウ家の出身であつたのであろう。とすればカダムパの名刹チルプウ寺院は、第二代座主以後は完全にヤルルンジョウウの影響下に置かれ、この寺院と一家とは密接不離の關係でヤルルン溪谷にその勢力を張つていたと思われる。古代の覇者の子孫が中世に尚小規模ながらもその勢力を保持することは極めて困難なことであり、その成功した例は非常に少い。事実古代ツェンポの子孫のうち、ユムテンの系統もチパ以後一、二代を以て史上からは消滅する。オエスンの系統においても、キデニマゴンの家系は、史上にはマルラ王朝として後々まで継承されたごとく記されるが、トゥッチ氏の研究によれば、十三世紀初頭にはもはや別系統のものに取つて代られたらしく(Pr. p. 69)、それは古代王朝の後裔とは見なせない。少くとも王名はヒンズー的となり、それは生活、信仰がチベット的なものを殆ど離れたことを暗示している。唯独りタシーツェグパペルの系統のみがヤルルンに抛り、中世の分裂動揺のうちにチルプウ寺院と結んでその家系を全うしたのである。

尤もチルプウ第六代座主ロトエオエの弟ツルチムサンポ Tshul khriims bzah po は、王統鏡のヤルルンジョウウを記した文末にその名を残し、又 (GR. p. 103b)。

ヤルルンジョウウ諸代のなせる事業を知らんと欲せば、ラツン・ツルチムサンポ著すところの王統記を見るべし。と記されている。この彼の著した「王統記」が、ケーペーガトン等の引く通称ヤルルンジョウウオチエジュン Yar kluns と記されている。この彼の著した「王統記」が、ケーペーガトン等の引く通称ヤルルンジョウウオチエジュン Yar kluns

jo bo chos hbyun であることは疑ない。マルボ史にも、やはり同様の系統を記したところに彼の名を出し (DMS. p. 30a)、『*Den sa thil Gdan sa thil*』に『*おごて出家し*』、『*王統記の大著 Rgyal rabs kyi deb ther chen mo*』を著せり。

と記している。従つて彼が自らの家系を中心に詳しい史書を書いたために、この系統はその事蹟を末代まで残すことになつたとも考えられる。しかし単に俗的諸侯が名刹の大檀越となることであれば、他の系統にもそれは行われていたことであつて、特に取上げる程のことでもない。一家のうちから幾人かが出家して名刹に入ることも既に屢々行われていた。しかし由緒ある寺院の座主を俗的諸侯の一家が独占することは十二世紀の初頭では未だ行われていなかった²³のである。ヤルルンジョウオはその先鞭をつけたものであり、中世貴族のあり方について一つの道を示したものと考えられる。

このことを社会的に少し詳しく考察してみよう。

古代王朝が崩壊し、ダルマの子孫が分立したとき、彼等には唯一にして神聖なツェンポという觀念は現実には存在しなくなつた。彼等は当時のチベットにおける相続についての觀念によつてその領地を分割していつた。当時のチベットに長子相続とか惣領制とかいう考えがある筈はなく、諸子等は父の支配領を分割することによつて自らの家を立てていつた。しかしこのような細胞分裂的な分割相続が、忽ちのうちにそのすべての家を零細化し、貴族的実力を極度に低下させるものであつたことは疑ない。不安定な中世社会に自らの家を全うするには、或る程度の家とその財産の集中ということが必要であり、分裂の限度があつた筈である。滯滞的な当時の社会で、家族人口の増加に見合う増産は望むべくもない。いわば分家の限度という壁に彼等は忽ち突当つたのである。ところが恰もその頃仏教が復興し、各地に僧団、寺院が多数發生することとなつた。勿論僧侶側から、「一人出家すれば全家族に幸福が与えられる」等の宣伝も行われたであろう。又信仰心の厚い人は喜んで自らの子を出家させたであろう。しかし現実には一家の経済的条件保持の立場からは、幾人かの男子の出家は止むべく

もなかつたのである。それは何も貧民の家のみには限らない。貴族の家でも分家できない男子は次々と僧院へ送りこまれたのである。

僧院の方でも貴族出身の僧侶は歓迎すべきものであつた。元來僧院はゲゼルシャフト的なものであり、そこでは修業による優れた僧侶が上位になり、一山の統轄に當る筈のものであつた。しかし平民出身の高僧が如何程いても中世の貴族社会で彼等が対等或はそれ以上の態度で俗的貴族に接し得たとは思われない。当時の僧院長は彼等俗的諸侯乃至は貴族等の紛争又は戦鬪の仲裁をしなければならぬという一種の社会的責任を背負つていた。平民出身の、生れながらに高貴性のない僧院長やラマが、このような重要な任務を充分に果し得たであろうか。寺格を高める上からも、たとえ象徴的でもあれ、貴族出身の僧院長は僧院側からも強く希望されていたに相違ないのである。

しかしそれにしても貴族出身のラマは多数の家から集つたと思われ、何故代々の僧院長が一家の独占に帰したのであろうか。この理由は多分次のような事情に基くものと思われる。即ち一般に僧院長の財産は僧団の財産とは別個に存在する。しかし僧院長が歿したとき、その財産は次の僧院長又は僧団に引継がれることはあつても、その出身の貴族の実家に戻ることはない。そこで貴族側は歿した僧院長に血統の近いラマを強力に推し、その財産と地位を彼に譲渡させるようにする。僧院の保持にその貴族が常々尽力を惜しまなければ、彼の発言は強大な効果を現すであろう。いわば貴族側はここに僧院長という名の別の分家を創設することになるのである。

しかもこの新しい形の分家の力は極めて大きい。紛乱の中世社会において最も安定した存在は僧院である。当時のチベツト社会では僧院は不可侵の聖地であり、俗人の抵抗できない神秘的勢力の保持者であつた。その僧院長を自らの家から次々と送出すことにより、貴族一家は俗的社会における安定性を獲得し、支配権をより強固に保持することができた。換言すれば

ば家格を一層高め、その存在の安定化には僧院勢力との密接な結びつきが最も必要であつたのである。

ヤルルンジョウォは失われた家格の神聖さを寺院との結合によつて再び獲得したのである。彼等はこれによつて小規模ながらも神聖家族としての社会的地位を確定化し、中世の社会に存続するを得た。ヤルルンジョウォの系統は単に古代王朝の子孫であるから、或は詳しい記録が残っているから研究に価するのでなく、中世チベット貴族の主要な型を早くから示したという点に、我々は歴史的意義を付与したいと思う。

註

- (1) ダルマの死が八四六年であることについては、佐藤長「ダルマ王の在位年次について」史林、一九六三年第五号三二頁以下参照。
- (2) この書については前掲論文三五頁参照。
- (3) 「ヤルルンジョウォ仏教史」はチベットの他のチョエジュン類に屢々引用されている。著者がヤルルンジョウォの系統に属するラブ・ツルナムサンボ Tsul Khriims bzai po にある故に(三二頁)この名で呼ばれるのであろうが、正式の名は明かでない。しかし古代王朝及びその子孫の事蹟がチベット史書に割合によく保存されているのはこの書の存在のためではないかと思う。この書を発見することはチベット学界の急務であろう。
- (4) 通鑑も会昌二年の条に略々同様のことを述べている。会昌二年が同六年の誤であることは前掲論文四七頁以下で述べた。
- (5) 但しギャボェはペルコルツェン Dpal khnor btsan の項

(京都大学文学部助教授)

又(G.B. p. 146b)。

このもの(『ペルコルツェン』とユムテンの御子チデゴンニエン Khri Ide ngon ken' その子リグバゴン Rig pa ngon の御代、己丑の年に反乱起り、陵墓は壊れたたり。

というが、叛乱の起つた己丑の年(八六九)、陵墓破壊の丁酉の年(八七七)はともに未だユムテン、オエスンの在世中であるから、この記載は誤である。

(6) Lalou, M., Inventaire de manuscrits tibétains de Touen-houang conservés à la Bibliothèque Nationale, I. Paris, 1939, Nr. 230.

(7) ラルー女史の論文は *IHQ*, XVI, 1940, p. 292 に載っていることであるが、筆者未見の故にトッチ氏の記述による(PR. p. 52, n. 1)。

(8) Lalou, Inventaire, I. Nr. 131.

(9) ユムテンの系統はチブゴンには何等記されていない。ウラン史はケーペーガトンのそれと全く同じで、唯 Khri Ide ngon

mgen や Khri lde mgon, lde po や lte so (ナンサン
 ナキヌトビト Lte bo) Tsha la Ye ges rgyal mtshan や
 Tsha la na Ye ges rgyal mtshan (J) Khri pa 以下諸
 名は同(じ)じ(同) (R.A. p. 19a)。キヤホエトは綴字の相違は
 Yum bstan, Khri lde mgon gnen, Khri lde po, Tsha
 la na Ye ges rgyal mtshan 以下(同) 最後の(同)は Bla ma:
 Bhor de ra dsa の二人になつた(同)(GB. pp. 145b, 146a).
 (10) ウィ・ツァンの十人は諸書の間(同)二三の出入がある。シ
 のそれは本文に引用したが(五四頁)「マタン」では次の(同)へ
 である(B.T. p. 147b)。

ウィの五人

ルメ・ツルチムシエラブ Klu mes Tshul khrimis ges
 rab

リン・イシーユンテン Hbrin Ye ges Yon tan

ラグシ・ツルチムシユンネー Rag gi Tshul khrimis

hbyun gnas

バ・ツルチムロト H Rba Tshul khrimis blo gros

スムズ・イシロー Sum pa Ye ges blo

ツァンの五人

グルモ・ラツカーワ Hgur mo Rab kha ba

ロトン・ドルジェフワンチュ Lo ston Rdo rje dban phyug

シャブユガのツォンツンシエラブヤンゲ Gab sgo Inahi

Tshon btsun ges rab sen ge

ダルマ王の子孫について 佐藤

ガーリン・オホキ兄弟 Mnah ris pa Hod brywad
 spun gnis

ホツンバ・ウバデカルワ Bo don pa U pa de dkar ba
 キヤホエも綴字に多少の差はあるが、人名は右と同じである
 (GB. p. 296a)。「マタン」キヤホエトは「ウィ・ツァンの六
 人」Dbus gtsan gi mi drug とらう呼び方があることを記
 しているが(B.T. p. 151b, GB. p. 304a)「六人が誰であるか
 は明記していない。テプゴン(同)はウィ・ツァンの六人の方を普通
 の呼び方に用いているが(B.A. pp. 67, 72)」。やはりその六人
 の名は記されていない。しかし「ルメその他を含むウィ・ツァ
 ンの十人」と呼んでいるところでは「反つて Lo (ston) Tshon
 (Tshon (btsun) ラグシ Rag gi Sba リン Hbrin
 ルメ Klu mes を挙げてくるから(B.A. p. 77)」。少くともテ
 プゴンではこれらを「六人」と見なしていたのであろう。

(11) リチャードスン氏が八四一年といふのは「この年にダルマ
 が即位と同時に廃仏を始めた」と見たからであらう。しかし私見
 を以てすれば廢仏は八四三年から始まったのが正しいから(佐
 藤「ダルマの在位年次」四九一—五〇頁)「八四三年」と訂正する
 べきであらう。

(12) リチャードスン氏の表では「一〇一七年に傍線を欠いて
 いるが、後に説くごとくテプゴンによつてこのことは証明される
 ので、確実な年次と見てよい。傍線があるべきである。

(13) シナ和尚二人の名は「ハシヤによれば、ハシヤン Ha gan

へ和尚とギムパグ Gyim phag ཡེ་ཤེ་རྒྱལ་པོ་ (BZ. p. 85)。

- (14) 藤枝晃「沙州帰義軍節度使始末」〔一〕東方學報、京都、第十二冊三分九四頁註(50)

- (15) Deméville, Le concile de Lhasa, une controverse sur le quietisme entre Bouddhistes de l'Inde et de la Chine au VIII siècle de l'ère chrétienne, Paris, 1952, p. 176.

- (16) ケーペーガトンにも同様の年次を挙げている (P.T.I. p. 124)。

- (17) テプゴンには仏教再興の年次について、ネルバパンディタ Nel pa paṅḍita Grags pa smon lam tshul khriṃs の説を紹介して大要次のごとく(BA. p. 61)。

ネルバは、「廢仏の辛酉の年から一〇八年間仏法は存在しなかつたが、一〇九年目の己酉の年に仏法は復興した」という。しかし私の考えでは、彼は寺院の建立年次を復興年次と誤っているように思われる。というのはルメの直弟子であり、彼の偉大さを述べているバシーネーテン Ba gñi gnas brtan が、

わが偉大なる師匠ルメ・シユラフツルチムとスムバ・イシーロトエは最初にルンシヨエジンパ Klun ḡod ḥbyin pa の溪谷に寺院を建てようとして失敗したが、鳥の年にギェル寺院 Sgyel がラモ La ho に建てられた。と或る手紙の中でいっているからである。

このネーテンの文は本文のケーペーガトンのそれと合せ考え、鳥の年は己酉の年(一〇〇九)、寺院のギェルはモルギェルであろう。従つてテプゴンのいうごとく、ネルバの説はギェル寺院の建立を仏教の再興と誤つたものである。中根氏はネルバが一〇八年という年数を掲げたのは仏教思想によつて割出したものと見ているが(年代基準一九五頁)、辛酉から数えれば確に己酉(一〇〇九)は一〇八年目であり、丁度そのとき偶然にギェルの創設という事実があつたので、これに係けたのではなからうか。勿論ネルバの説も、辛酉を他の仏教史家と同様一ラフチユンを脱落した計算の辛酉と見ていることはどうまでもない。

- (18) Hackin, Joseph, Formulaire sanscrit-tibétaine du Xe siècle, Paris, 1924, text p. 16.

(19) ギャボエはツエデの項には(GB. p. 152a) 支配者ツエデ Rise Ide の生涯の後半に、トプワツァ・ジャムペーベル Khro phu lo tsha Byams pahi dpal はインドよりパンディタを招聘すべく派遣され、カチエンチエン・シャーキャシュリー Kha che paṅ chen Gya kya gri [ここに招聘せられたり]。

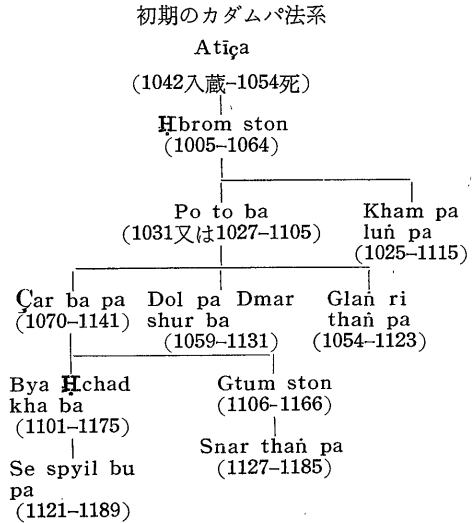
といつて、カチエンチエンがツエデによつて招かれたことをいう。トプワツァワがカチエを招いたことは事実であるが、それがツエデの命によつたことは他の書には全く見えない。又カチエンチエンはテプゴンによれば一一二七年に生れ七十八歳で一一二〇四年に入藏し、十年滞在中に帰国し、一一二五年に

歿している (BA. p. 1063)。トゥッチ氏は別の史料により、一四五年に生れ、一二四三年に歿したことをいひ、特にチブマンの生年が古すぎることを注意している (TPS. p. 355)。何れにせよ入蔵の年次二〇〇四年は一致しているから、右のギャボエの記載を信ずるならば、この頃にツェデは在位したことになるであろう。しかし一〇七六年の丙辰の宗会を主催したものが、それより一三〇年も後の時代に生きていることはあり得ないことである。ケーペーガトンによれば、ツェデの父オエデはカシミールのツニャーナシユリー Kha che Dsha na gphi へ Jānagri を招請しており、ツェデも、出身は不明ながらパンディタ・シワサンボ Shi ba bzam po (≪Gantihadra?) なるものを迎えている (PT. IV. p. 142a)。これらが誤られてギャボエの記事は作られたのではないかとの疑がある。尚カチエパンチエンと称せられる人物は必ずしもシャーキャシユリーバードラのみに限らないことを注意しておきたい (cf. BA. p. 69)。

(20) チルプツ寺院はヴァイセルにはルンシヨエチルプツKluns god spyil bu とよつてゐるからヤルルンに存在したのであるが (VS. I. p. 154)、正確な位置は明かでない。その建立はジャチエカーワ Bya Hchad kha ba の弟子セチルプツ Pa Se spyil bu pa (一一二一一一八九) によつて行われたが (カールダム派史二三八頁)、その年次は不明である。しかしセチルプツは一一七九年にチエカーワが歿した後、チエカーサルマ

ダルマ王の子孫について 佐藤

〔第七表〕



Hchad kha gsar ma とチルプツの「両寺院に相互に在住した」というから (前掲書) 一一七九年には既に建立されていたものと考えられる。チルプツ第二代座主のラルンギワンチュはセチルプツの弟子である。参考のためアティンシャよりセチルプツに至る法系を羽田野氏によつて記すと第七表のごとくなる (カールダム派史一九三頁)。

(21) チルプツの歴代についてはギャボエにも簡単な記載があるが (GB. p. 302a)、その内容には混乱が多いと認められるので、ここでは取上げない。

(22) テブゴンによれば、第七代はリンチュエンセンゲ Rin chen sei ge で、一三九七年まで座主を勤め、その後は、

(八) ラーシャーキャソエナムギエンツェンペルサンボ
Lha Shakya bsod nams rgyal mtshan dpal bzah po

(九) ソエナムルンダツブ Bsod nams lhuñ grub

(十) ソエナムギエンツェン Bsod nams rgyal mtshan

であるという(カーダム派史(三四頁)も、マイヤルでは更に十一代以下の名が加わり (VS. I. p. 154)。

(十一) シャーキャオエセル Shakya hod zer

(十二) ベンテンサンボ Dpal ldan bzah po

(十三) ニエンラダグ、Shan grags pa

(十四) シエニエンサンボ Byes gñen bzah po

(十五) ノエキヘル Bsod rgyal

(十六) チエキヘルペルサン Chos rgyal dpal bzah

(十七) ガワンギエンツェン Nag dban rgyal mtshan

であり、「以上、チエカーワ Hchad kha ba とチルプツの座主は合一せるものなり」と述べている。ヴァイセルでは引続き、チルプツのケンボとロブンの伝承を述べるが、何れもその出身については何等記すところはない。

(23) 叔姪相繼いで僧院長となる例は十二世紀初頭以前に全然なかつたのではない。タンボチエのクトン・ツォンルイユンドゥン Khun ston Brtson ngrus g.yuñ druñ が乙卯の年(一〇七五)に歿したとき、その後を継いだのはオンボ・ジュンネー

ギエンツェン Dbon po Hbyuñ gnas rgyal mtshan であつた(BA. p. 94)。オンボ(甥)と呼ばれるからには多分クトンの甥であろう。その後を継いだと思われるク・セルツォン Khun Ser brtson もク氏を称しているからにはその一族であろう。しかし次代のギエルツァ Rgyal tsha は、その親族関係は何等記されていなく、又彼を以てドメル Gru mer 以後のタンボチエの僧院長の系統は絶えたのである (ibid.)。テブゴンの彼等の親族関係の記述は曖昧な故に、ここでは史料として取上げなかつた。唯キエルツァの死後、残された寺院とその財産を相続したラブランバ Bla brān pa のサンボペル Bzah po dpal からは明かに叔姪の継承が始まつてゐる (ibid.)。しかしサンボペルの在世年次はテブゴンでは全く記されていなく、唯ラブランバの系統をテブゴンはシヨンスウギエンツェン Gshon nu rgyal mtshan、チュンボ・ロトエペル Gcun po Blo gros dpal、サンボペルと云え、シヨンスウギエンツェンはチャグロツァフ Chag lo tsā ba の弟子であるという (ibid.)。チャグロツァフ・チエジエペル Chos rje dpal は、レーリヒ氏によれば一一九七—一二六五年の在世であるから (BA. p. 1047, n. 1)、サンボペルの僧院長就任は当然十二世紀の後半以降にあると思う。やはり確実な史料としてはチルプツの僧院のそれが最も早いのである。

(24) その諸例は数多いが、若干の例は佐藤長「元末明初のチベット状態」明代滿蒙史研究、京都、昭和三十八年、五六五頁以

下参照。

補注

(1) 丙辰の宗会にはゴグロツァワ・ロテンシェラブ Ruog lo tsai ba Bio Idan ges rab が出席している(カーダム派史一九六頁)。ゴグロツァワの略歴はテフゴンにあり(前掲書)それによれば己亥の年(一〇五九)に生れ、五十一歳で歿したというから、一〇九九年まで生きていたのであろう。宗会に参加したとき、ツェデの子ワンチェデ Dban phyug lde が彼の施主となることを約束しているから、その年一〇七六年の頃にはツェデは既に壮年を過ぎていたのであろう。ウラン史にもゴグロツァワがツェデの許に至つたことは出ており(RA. p. 20a)別の個処では略歴も具わつてゐる(RA. p. 28a)。但しその生年を辛亥 leags mo phag (一〇一一又は一〇七一)とあるのは明かに誤である。

(2) ジョガーの生存年代についてはジグメリグペードルジェの「蒙古仏教史」Hor chos hbyun に手がかりとなる史料がある。即ちチンギスハーンは第四ラブチュエンの丁卯の年(一二〇七)にチベットに作戦しようとしたので、チベットでは有力者が会議を開き、サキヤパンチェン Sa skya pan chen を使者として送ることを決定した。このときの会議の出席者はテシ・ジョガー Sde srid Jo dgab、ツアルバのクンガードルジ K Tun gal pa Kun dgah rdo rje 以下三百人であつたと云うが(Georg Huth, Geschichte des Buddhismus in der

Mongolei, Strassburg, 1896, S. 24)トツッチ氏がジョガーをヤルン王ジョガーを指すものとしてゐるのは(TPS. p. 9)、正鵠を得ているであらう。これによつてジョガーは一二〇七年頃実在した相当有力な人物であることが証明される。

略語表

新伝—新唐書卷一四六下、吐蕃伝下

通鑑—資治通鑑

年代基準—中根千枝「チベット史における年代基準の決定について」東大東洋文化研究所紀要第五冊。

カーダム派史—羽田野伯猷「カーダム派史」東北大学文学部研究年報第五号、一九五四年。

古代史—佐藤長「古代チベット史研究」上・下、京都、昭和三十三年。

王統鏡—Bsod nams rgyal mtshan, Rgyal rabs gsal bahi me lon.

ダライ仏教史—Nag dban blo bzani rgya mtsho, Rdsogs

Idan gshon nu dgah ston.

ウラン史—Kun dgah rdo rje, Hu lan deb ther.

ギヤホキ—Rgya bod yig tshan.

プン—Bu ston gyi chos hbyun.

テフゴン—Gshon nu dpal, Deb gter sion po.

ブルホ史—Bsod nams grags pa, Deb ther dmar po gsar ma.

- ལཱ་ཡཱ་ལཱ་ལཱ་=Dpañ bo gtsug lag hphren ba, Mkhas
 pañi dgañ, ston, edited by Lokesh Chandra, New
 Delhi, Pt. I, 1959, Pt. II, III, 1961, Pt. IV, 1962.
 ལཱ་ཡཱ་ལཱ་ལཱ་=Sans rgyas rgya mtsho, Vaidurya ser po,
 edited by Lokesh Chandra, Pt. I, New Delhi, 1960.
 ལཱ་ཡཱ་ལཱ་ལཱ་=S. Ch. Das, Pag Sam Jon Zang, Calcutta'
 1908.
 BA=George N. Roerich, The Blue Annals, Calcutta,
 Pt. I, 1949, Pt. II, 1953.
 BT=トドム
 BZ=Rolf A. Stein, Une chronique ancienne de bSam-
 yas: sBa-bzed, Paris, 1961.
 DMS=トナカ
 GB=トナカ
 GR=土鏡
 PR=Giuseppe Tucci, Preliminary Report on two Sci-
 entific Expeditions in Nepal, Rome, 1956.
 PT=トドム
 RA=Red Annals, Gantok, 1961.
 TIR=Hugh E. Richardson, A Tibetan Inscription
 from Rgyal Lha-khan; and a Note on Tibetan Chro-
 nology from A.D. 841 to A.D. 1042, JRAS, April 1957.
 TPS=G. Tucci, Tibetan Painted Scrolls, Rome, 1949.

TTK=G. Tucci, The Tombs of the Tibetan Kings, Rome, 1950.

VDL=タライ仏教史

VS=トドム

〔付記〕

チルプツ僧院長の問題について、病軀をおして自らカダムハ派
 文献を調査、教えられた羽田野教授に厚く御礼申上げる。又チ
 ャット文献の難解の個所にいろいろ示教を与えられたソナムキ
 ヤインキ師 Nor Thar rise rin po che Bsod nams rgya
 mtsho に深甚の謝意を表した。